
剣士と神子の物語

2000万パワーズ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

剣士と神子の物語

【Nコード】

N1147Y

【作者名】

2000万パワーズ

【あらすじ】

騎士を目指す少年レオは、村はずれの川辺に流れ着いた少女を助ける。ところがその少女は魔王復活を目論む邪教の神子で……

プロローグ

山間の小さな村に、危急を告げる半鐘が響き渡った。

「なんだ？ 何が起こったんだ！」

「騎士団だ！ 騎士団が攻めてきたぞ！」

「バカな！ なぜこの村のことが……！」

慌てて家からとび出してきた少女を、怒号と悲鳴が包む。

武器の打ち合う音が聞こえる方へ顔を向けると、急峻な斜面へ
ばり付くように立ち並ぶ家々を打ち壊しながら攻め上ってくる集団
が目に入った。

白銀に輝く鎧兜、まぎれもなく帝国の誇る神聖騎士団だ。

と、そのうちの一人が少女を指さして声を上げる。

「いたぞ！ 目標はあの銀髪の娘だ！ 必ず生かして捕える。他の
者は一人残らず殺せ！」

「え……、私……？」

呆然としていた少女の腕が、不意に強く引かれる。

「アリシア、何ぼーっとしてるんだ！ 逃げるんだよ！」

よろめきながらも走り出したアリシアが目を上げると、よく見知
った顔があった。

「エミリオ……！」

普段から何かと世話を焼いてくれる頼れる幼馴染顔は、しかし恐
怖と怒りに引きつっていた。

村の端まで来たところで、手を引かれながらもつい後ろを振り返
る。

「ああ……！」

アリシアの育った村は、一面火の海と化していた。

これまでの少女の人生が、その思い出の全てが、炎の中で灰にな
っていく。

「……どうしてこんな」

大きな瞳から、止めどなく涙があふれる。

「やつらが狙ってるのはお前だ、アリシア。真なる神の神子であるお前を、やつらに渡すわけにはいかない。なんとしても逃げるんだ」
止まっていた足を、エミリオの叱咤が後押しする。二人は再び駆けだした。

しかし。

「で、でも、村の出口は下にしかないよ？ こっちに逃げてても、すぐ行き止まりじゃ……」

アリシアの指摘は、すぐに無情な現実となって目の前に立ちはだかった。道が途切れ、切り立った崖に突き当たってしまった。見下ろすと、はるか下に流れが見える。そもそも村の唯一の出入り口である麓からの道を通って敵が攻めてきた時点で、逃げ場などどこにもなかったのだ。

「なんとか、あいつらをやりすごして……」

エミリオも辺りを見回すが、あいにく身を隠せそうな場所は見当たらない。

どうすることもできずに立ち尽くしている二人の背後から、大人数の足音が近づいてくる。

「どうした、もう逃げないのかね？」

嫌味な声に振り返ると、隊長らしき一際派手な鎧を着た男が、数名の騎士を従えて立っていた。すぐに半円状に二人を取り囲む。

「娘、我らはお前だけは生け捕りにし、他は皆殺しにせよと命を受けている。だがあまり追いつめて、足を滑らせでもされたら困る。そこでだ」

そこで一旦言葉を切り、いやらしい笑みを浮かべる。

「お前がおとなしく我々についてきてくれるなら、そちらの男も助けてやるう。どうだ？」

男の台詞に、アリシアは戸惑う。このままではエミリオも殺されてしまう。どうせ逃げられる望みがないのなら、自分が捕まってエミリオだけでも助けたほうがいいのでは？

「ほ、本当にエミリオを助けてくれるの……?」

「なっ、だめだアリシア、何言ってるんだ!」

エミリオが慌てて制止しようとするが、男は笑みを崩さない。

「もちろんだとも。私も騎士だ。約束は守るさ」

その言葉に、心が決まらないままフラフラと数歩踏み出したときだった。

男が急に笑みを消し、短く「やれ」とつぶやいた。

「ぐっ」

背後から聞こえた声に振り返ると、エミリオの腕に矢が刺さっていた。

「エミリオ!」

「だ、大丈夫だ」

駆け寄ったアリシアに気丈にも笑みを見せるエミリオだが、その額には脂汗が浮いている。

「ちっ、下手くそが。きちんと仕留めんか。せっかく娘を引き離れたというのに」

男は苦々しい顔でこちらを見ている。

「そんな、どうして! エミリオには手を出さないって言ったのに!」

「フン。なぜこの私が平民、それも汚らわしい異教徒との約束を守らねばならん」

そう吐き捨てると、アリシアに物を見る様な視線を向けて命令する。

「とにかく、これでその男はもうお前を守ることはできん。どうせ逃げられんだ、これ以上手間をかけさせるな」

アリシアの足元から、じわじわと絶望が這い上がってくる。もう、どうしようもないのか……

そのとき、エミリオが怪我をしていない方の手で懐から何かを取り出し、アリシアの手に握らせる。見ると、小さな袋だった。中身はわからない。

「これは……？」

「さあ、よくわからんが、お前にとって大きな意味を持つ物らしい。昔、お前の親父さんから預かったんだ。自分にもしものことがあつたら、アリシアに渡したくねってな。しっかり持って、絶対なくすんじゃないぞ」

「え、でも……」

今、こんな物を渡してどうしようというのか。どうせ二人とも助かりはしないのに。

不意に、エミリオが無事な方の腕でアリシアを担ぎ上げる。

「きゃっ」

「最後の手段だ、しっかりつかまっとけ」

そして、背後の切り立った崖に向かって走り出す。

「なっ、いかん。矢を射る、止めるんだ！」

エミリオの行動に気付いた男のわめく声が聞こえる。数本の矢がエミリオの背に突き刺さるが、構わず走り続ける。

「行くぜ、舌かむなよ」

歯を食いしばってそう言うやいなや、エミリオは空中に身をおどらせた。小さな体を、庇うようにきつく抱きしめる。

アリシアはぎゅっと目をつぶり、幼馴染にしがみつく。

(助けて……私はどうなってもいい、エミリオだけでも助けて!)
必死に祈るアリシアの手の中から、かすかな光が漏れる。目をつぶっている彼女は気付かなかったが、その白い光は次第に強まり、アリシアとエミリオの体を包み込んでいく。

まばゆい光に包まれて、二人は水面へと吸い込まれていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1147y/>

剣士と神子の物語

2011年11月1日02時09分発行